

カミュ著『ペスト』について

新型コロナウイルス感染症の影響が続くなか、70年以上前に書かれた小説が今、注目されています。フランスの作家アルベール・カミュが1947年に発表した小説『ペスト』です。ペスト菌と新型コロナウイルスとの違いはありますが、今経験していることは、この小説を架空の物語にとどめておいてはくれません。考えさせられることが多く、現実味を帯びて迫ってきます。時間があれば読んでほしい一冊ですので、紹介させていただきます。

舞台は北アフリカの国アルジェリアの港町、オラン。オランは実在する町で、首都アルジェに次ぐアルジェリア第二の都市です。時代設定は「194*年」で、当時アルジェリアは1830年から続いたフランスの植民地でした。(アルジェリアが独立したのは1962年ですが、アルジェリア戦争と呼ばれる独立戦争は1954年からで、この武力闘争などがアフリカ諸国の独立運動を呼び起こし、1960年にアフリカの17の国が独立する「アフリカの年」をもたらしたといわれています。)

オランの気候は「地中海性気候 (C s)」です。温帯で、夏に降水量が少なく乾燥することが特徴です。小説でも天候の描写がペストの拡大や収束のイメージに重ねられているような気がします。物語は4月中旬から起き始めたおびただしい数の鼠の死から始まるのですが、感染拡大を防ぐため市の門が閉鎖(ロックダウン)され、外部と遮断された街で病気が人々の命を奪っていく季節は「太陽が乾燥しすぎた家々を燃え上がらざらばかりに熱す」夏のことです。収束に向かうのは、「洪水のような雨」が降った後の12月から1月にかけてとなっています。

さて、小説の本題に関してです。知られているとおりこの小説では、ペスト菌という見えない敵と戦う医師ベルナル・リウーや、その正体がなかなか明かされないジャン・タルーらの行動を通して、「不条理」に直面した時に示される人間の様々な姿が描かれています。難しい言い回しもありますが、印象に残る言葉や場面も多くいろいろと考えさせられます。

例えばリウーの言葉。リウーは、オラン市で



「奇怪な病」「謎の熱病」が流行し、死亡例が出始めてから、この疫病が「ペスト」であると確信します。「どうもこれはペストのようですね」と。緊急の対策をとるよう訴えますが、法や行政は慎重です。「法律によって規定された重大な予防措置を適用」しなければならないが、そのためには「それがペストであることを確認する必要」があり、「その点に関して確実性は必ずしも十分ではなく慎重考慮を要する」と。この時リウーは言います。「これは語彙の問題じゃないんです。時間の問題です。」

また、ペストが市を覆い尽くそうとする頃、ペストと闘う資材や人員が不足する中で、リウーは、「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです。」「僕の場合には、つまり自分の職務を果たすことだと心得ています。」と言います。自分の職務ということでは、登場人物のレイモン・ランベール(パリからオランを訪れていた新聞記者)や、保健隊の同志としてリウーと共に活動するとともに手帳にこの街で見聞きしたことを記録していたタルー、市役所に勤めるジョゼフ・グランなども、それぞれの立場はありながら、自分が関わりを持つことになった役割をそれぞれに応じたかたちで誠実に果たしていく人物たちであるといえます。

派手さはないのですが、「大人」の人間を感じさせます。例えば市臨時補助吏員グランです。昼間は役所で働き、夜は若い頃に別れてしまった妻を思いながら小説のようなものを書いていく50がらみの何のヒーロー的なものも持たぬ男ですが、保健隊が結成されると一種の幹事役を務めます。「(他のことをするには年を取り過ぎていた)彼が望んだのは、ささやかな仕事で役に立ちたいということだけ」で、仕事の合間に献身的に活動し、ペスト終息後は、また元の平凡な生活に戻る。もう「脱帽」です。